

のびのび ユニークな日本語教育

ブラジル・サンパウロ市内

日伯のびる学園

日伯のびる学園園長

志村・宗・マルガレッチ

Margareth So Shimura

このコーナーでは、特色ある日本語教育を実践している機関の教師の方々に、現場のコースデザインやコース運営の状況について、紹介していただきます。



1. はじめに

ブラジルでは1998年が日本移民90周年に当たり、各地で種々の催しが開催されている。日伯関係、出稼ぎ問題、日系人子弟の社会問題、老人問題と色々挙げられるが、その中でも日本語教育(その在り方と問題点)が大きな課題となっている。

ブラジルへの新規移住がなくなった現在、1世教師が減り、私たち2世、3世教師が4世、5世の児童に日本語を指導している。日本語教育は母国語教育ではなく外国語教育となり、様々な問題となっている。その問題点を当学園では考慮して解決を図っている。

2. 学園紹介

日伯のびる学園は11年前に開園し、現在に至る。サンパウロ市内のパライゾ区にある私塾である。公共施設や文教団体、PTAの援助などは一切受けていない。

生徒数は約150名で、現在男子67名、女子76名であり、非日系人が4名、ハーフが約20%、その他は日系人である。4歳児から成人クラスまでと年齢の差は大きい。教師数は常勤教師2名に助手が2名である。各クラスの生徒数は当初10名であったが、現在は15名である。

授業は週に3回(月・水・金と火・木・金の2コース)

であり、金曜日は情操教育として、作文、会話、書道や図画などを指導している。1回の授業は1時間半である。他に年間行事として4月に親睦運動会、そして12月に学園祭を行う。授業スタイルは複式授業である(写真1)。

3. 授業スタイルおよび内容

当学園では複式授業を行っているので単式授業とは全く違った授業スタイルである。複式授業では学習者が持つ日本語能力がまちまちである。日本語に対するバックグラウンドもそれぞれ違う。全く日本語が分からない学習者、日本語が理解できる学習者、日本語を家庭内で使用



写真1 授業スタイルは複式授業



する学習者など様々である。このような学習者を1クラスに入れ、日本語能力を向上させるのは容易なことではない。

学習者各自の進度がまちまちであるため、教師はその学習者のニーズに合わせた授業スタイルを生み出す必要がある。当学園ではこのような点を念頭に置き、学園なりの複式授業スタイルを作った。その授業スタイルは以下のとおりである。

まず、1クラスに10数人の生徒が入る。年齢はある程度まとめている。4歳から7歳までぐらいのクラス、8歳から11歳までぐらいのクラス、12歳以上のクラス、成人クラスに分かれる。

その他、月・水に1クラスと、火・木に1クラス、日本語能力だけでなく、年齢もまちまちのクラスがある。これは遠くに住んでいて、兄弟そろってしか来られないとか、学校の都合、英語塾の都合、水泳教室、パレーやピアノ教室等のため、どうしても学園側が指定した時間に来られない生徒を集めたクラスである。

授業内容は、幼児の場合、初めに文字を書く練習を10分間ぐらい行う。それからその日の連絡事項を連絡ノートに黒板から書き写す。その後、各自宿題を提出し教師がそれに目を通す。それから読み書き指導、会話指導などと授業を進めていく。

4. 教師の配置

日本語が理解できる生徒達には、日本語の方がよくできる1世教師が1名と助手が1名付く。1世教師は内容の説明などを行い、助手は読み方を聞いたり漢字テスト等を行う。

日本語の分からない生徒達には、2世あるいは3世の教師1名と助手が1名付く。教師は文法の説明などをポルトガル語で行い、助手は教師の指示に従い口頭練習などを行う。

複式授業の場合よく起こることであるが、一人の教師が二役も三役もやらなければならない。例えば、黒板で漢字テストを行いながら朗読を聞くとか、宿題を添削しながら口頭練習をやるとか、常に教師は学習者に気を配っている。教師はこのような授業スタイルに慣れなければならない。教師にとってそれは重労働であるが、複式授業では教師達は互いに足りないところを補いながら授業を進めていくことが必要である。

5. 使用教材

複式授業では学習者のニーズに合わせて指導を行わなければならないので、使用教材も様々なものを用いている。教科書、ハンドアウト、絵カード、コンピュータ、ビデオ、LL教材等である。

日本語が分かる生徒にはブラジルで作成された教科書より、日本の教科書の方が適している。当学園では、『新しい国語』（東京書籍）を使用している。生徒は日本の子供が使用している教科書をブラジルでも使用できることを誇りに思い喜んで学ぶ。また、日本の話題等も出ているので現代の日本の子供の世界を少しは知ることができ、日本語を教えるには効果的である。

日本語が分からない生徒は年齢によって使用教科書が違ふ。12歳までの児童には、日本の教科書と並行して学園作成のテキストを使用している。日常会話を主とした学園の児童のニーズに基づいて作成されたものである。絵が豊富に使用されているので児童は喜ぶ。日本語が分からない13歳以上の生徒には『初級日本語』（アリアンサ出版）と学園作成のハンドアウトを使用している。初級を終えて中級になると、日本の教科書と並行してハンドアウト等を使用している。

ひらがな、カタカナの導入段階では副教材として絵カードやコンピュータを使用している。語彙を定着させるためのコンピュータゲーム等も当学園で開発している。また、『Triple play plus : Japanese』（Syracuse language system staff）を使用している。マイクロホンを使い日常会話を行ったり、語彙や動詞、形容詞の定着もできるので学習者の間で大人気である。

また、会話の授業では小道具の箱を常備し、実際に場面を設定して会話指導を行っている。時折、現代の日本社会や日本人の生活をビデオ・テープを使って紹介している。このように色々な形の教材を使用し日本語を魅力的な言語にし学習者の興味を引き、日本語の指導を行っている。

6. 教授法

当学園では複式授業を行っているので学習者が教師の進度に合わせるのではなく、教師が学習者の進度に合わせなければならない。教師がダイナミックに授業を進めなければ学習者は興味を持たない。日本語を上手に、おもしろく、分かりやすく教えなければ学習者は喜んで学園に来ない。

複式授業という難しい環境の中で授業を進めていくには効果的な教授法が必要となる。当学園には4歳児から成人までいる。ここでは成人用の教授法ではなく、主に児童向けの教授法について説明する。

児童が学園に入園すると、まずひらがな指導を行う。数多くの語彙を教えながらひらがなを導入する。この段階では絵を豊富に使う(図1)。また、字を書かせるばかりではなく、コンピュータのひらがな定着ゲームも大いに使用している(写真2)。ひらがながマスターできた段階で生徒はもう既に150ぐらい語彙を身につけている。動物や果物、野菜、体の部位等は確実に身につけている。

ひらがなの導入が終わると、日本語が分かる生徒も分からない生徒も一様に日本の教科書を使用する。その目的はひらがなの運用能力を身につけることにある。また、簡単な文型を身につけることにある。日本語とポルトガル語の文の構文の違いを、幼い時から気づかせ身につけさせるために生徒の教科書には各文の語彙の番号を打ち、その番号にしたがって文をポルトガル語に訳させる。初めは両国の文の構成が全く違うので学習者は戸惑うが、徐々に慣れていく。その課の内容をはっきり理解しなければ次の課に進むことはできない。

日本語がある程度分かる生徒はそのまま日本語の教科書で学習を続ける。日本語の分からない生徒は、語彙がある程度そろい、日本語のリズムやイントネーションまたは文の構造に慣れた段階でカタカナを導入する。カタカナもひらがなと同様に絵カードやコンピュータを使用しながら導入する。カタカナを教える場合、アソシエーションメソッド(連想法)を使用している(図2)。

カタカナの導入を終えると、当学園で作成されたテキストを使用する。そのテキストは日常会話を主としたテ

図1 ひらがなの教材

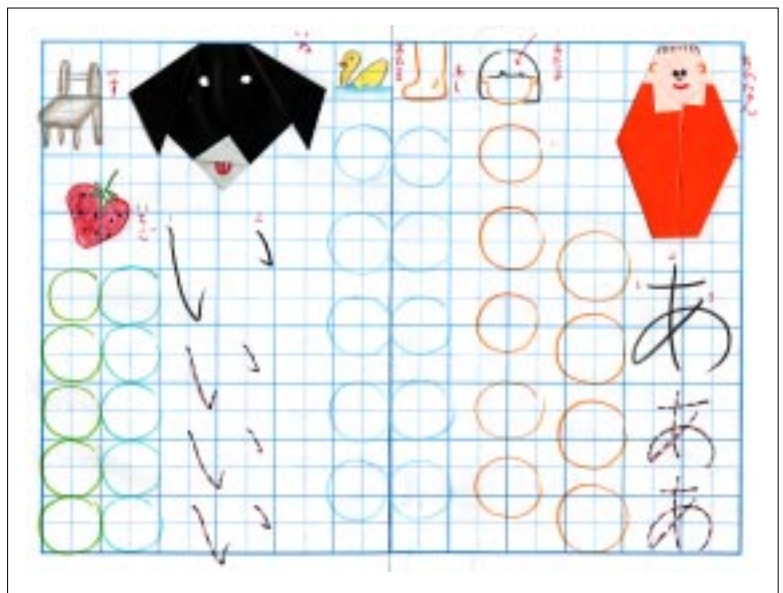
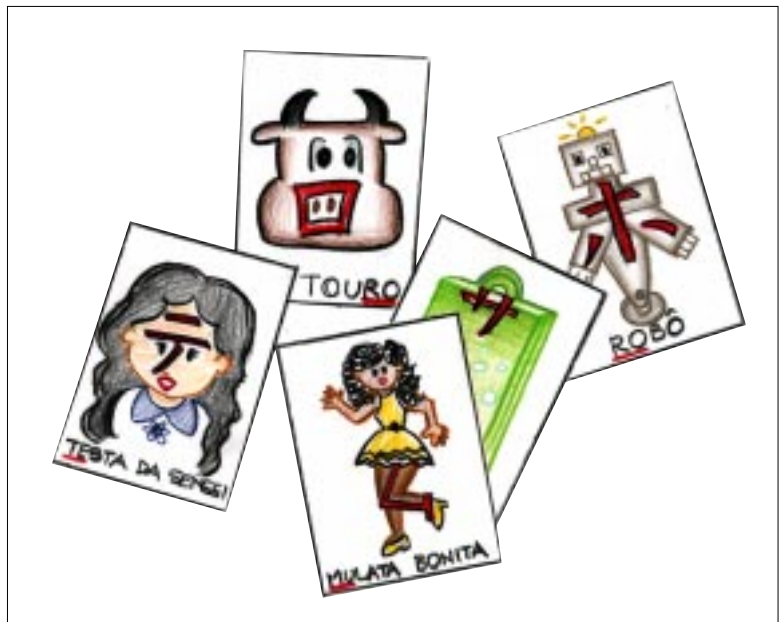


図2 連想法を使用したカタカナの教材



キストである。ドリル(練習)等が豊富にある。12、13歳の生徒になると文法的な説明がよく分かるようになっていたので、『初級日本語』(アリアンサ出版)を使用して、ポルトガル語と日本語の文法を比較しながら文型をどんどん生徒に教えていく。生徒はこの段階では日常会話はでき、作文などが日本語でどんどん書けるようになっていく。

当学園では教師が学習者をまずよく見つめてから教授法を選ぶ。ある学習者にとっては最高だった教授法が、他の学習者にはあまりよくない場合もある。そのような場合には、また新しい教授法を生み出さなければならない場合もある。そのため型にはまった教授法はない。入園する学習者によって教授法は常に変化している。教師は常に新しい教授法を生み出さなければならない。

7. 教育効果

学習者一人ひとりの速度や能力に合わせて指導しているので、教えたことは確実に身につけている。会話は少々劣るが、日本語を理解し文を構成することは十分できている。学習者は自己のペースで学習できるので気軽に学園に来る。単式授業では見られない教師対学習者のインターアクションが、複式授業ではできる。そこで、教師と学習者との関係が濃密になる。

また、日本語力のある生徒と全くない生徒が同じクラスにいるため、分かる生徒が分からない生徒に教えたりする。日本語力がない生徒同士でも、先に入園した生徒が新入生に自分が学習したことを教えたりしている光景も見られる。このように生徒同士の輪もうまく保たれている。

また、面白い教育効果を上げているのが副教材として生徒達に自由に使用させているコンピュータひらがな・カタカナ・語彙定着ゲームとビデオゲームである。コンピュータゲームは4、5歳児から使用している。カタカナを学習していないのにコンピュータで遊びながらカタカナをマスターしてしまう5、6歳児もいる。

また、ビデオゲームは、日本語の学習とは直接関連していないが、生徒に学習意欲を持たせるのには最高である(写真3)。よく勉強ができた生徒やその日の目標を達成した生徒は、授業が終わる10分ぐらい前にゲームで遊んでもいいと許しを出す。生徒は遊びたいので一生懸命勉強に励む。

子供は自分から進んでなかなか学習しないので、教師または学園側が学習意欲を出させるように仕向けなければならない。学園では学習意欲を持たせる一つの手段としてインターネットを4年前から使用している。Eメールで宿題を送ったり学習者とのコミュニケーションを取っている。

このように色々な手段を使用しながら学習意欲を向上させている。

8. 問題点

作文力や理解度に対して会話が劣っている。それは日本語を使用する場所や機会がないからである。学園で週に3時間学習しても十分な会話はつかない。

次の問題点はアメリカンスクールに通っている日系人で英語でしか話せない学習者である。この学習者には日本語を英語の文法と比較しながら英語で説明しなければ



写真3 ビデオゲームで学習意欲を持たせる

ならない。ブラジルの日本語教師はポルトガル語だけでなく、英語力も十分につけなければならない。そういう時代になりつつある。

9. 今後の課題・展望

ブラジルの日本語教育は今後ますます厳しくなることが予想される。英語塾やフランス語塾、ドイツ語塾に劣らないように常に新しい教授法や教材を生み出さなければならない。また、時代に沿った新しい機材等もどんどん取り入れ、日本語教師は時代に遅れないように常に研究や研修をする必要がある。

21世紀はすぐそこまで来ている。国際化時代に育つ若者にとって数多くの言語を学ぶということは非常に大切なことである。社会人になり国際人になるにつれて言語は欠かすことのできない大切な要素となる。

このような若者達に言語を教えている私達日本語教師の責任は重い。今後の課題として慎重に今まで通り研究や研修を積み重ねながら頑張っていきたいと思う。そして、教師としていつまでもいつまでも教える喜びを感じたい。また、学習者達には覚える喜びを与え続けたい。

のびる学園スタッフ

志村・宗・マルガレッチ (園長)
Margareth So Shimura

宗・花子 (顧問・教頭)
Hanako So

宗・智子・デアナ (成人の部教師。コンピュータ教材作成)
Deana Tomoko So

伊藤・美香・クリスチナ (助手)
Cristina Mika Ito